

# 漁具カ アサヤ株式会社 宮城県気仙沼市

## 気仙沼発、老舗漁具屋的 I・Uターンのススメ

「気仙沼の漁業を江戸時代から支えてきた、漁具・船具・漁業資材の老舗「アサヤ株式会社」。同社の次世代を担うリーダーは、全く別業界からのUターン組であった。地元に戻るまでの葛藤と仕事の面白さは。

「漁具」と聞いて「ああ〇〇のことだ」と分かる方はどの程度いるだろうか。釣りを嗜んでいる人なら簡単かもしれないが、網や集魚灯、魚群探知機（ソナー）なども指す。

アサヤ株式会社は、宮城県気仙沼市で漁業を扱う1850年（嘉永3）創業の老舗だ。気仙沼はカツオやサンマ、カジキなどの水揚げが豊富であり、同社はその周辺漁民の生活を江戸時代から支えてきた企業である。現在は三陸一帯に支店を構え、従業員は100名を超える。

気仙沼出身である同社の専務取締役・廣野一誠さんは日本IBMやベンチャー企業での実務を経て、2014年（平成26）に帰郷。都内のIT企業へ従事しながら、将来的には家業を継ぐために経営を学べる仕事を探していた。

そんな時、転職が訪れる。2011年の東日本大震災だ。「都会で何かを得て帰りたい」という思いから地震後すぐに帰ることができなかった。しかし、数年が経過し少しずつ復興がすすむ地元を見て「地元から逃げて」と感じ、Uターンを決意したという。

地域に根付いたトラディショナルな産業に従事する中で大切なことは、「自分の業務やスタッフ、顧客や顧客の過去の苦労

話なども含め「会社のある環境のファン」に自分があること」と廣野さんは話す。最初は慣れない業務や「自分がなにかしなくては」という焦りから戸惑うことも多くあったが、人も環境も好きになる気持ちを持つことで、自然と自分自身が地場の人たちに寄り添うことができるようになった。

これまでのIT系の仕事と異なり、漁具が支える漁業は自然に左右される仕事だが、そこが



1 定期的に地域の住民へ向けて会社見学やワークショップを行っている。  
2 未来の気仙沼を担うであろう子どもたちも、初めて見る漁具に興味津々。



3 廣野さん。4人のお父さんでもある。4 アサヤの漁具は気仙沼の漁業を支えてきた。漁師との会話から新しいアイデアが生まれることも。  
5 従業員の皆さんとともに。ここ数年で30名ほど新規採用するなど、次世代の育成にも力を入れる。



興味深く面白いと廣野さんは語る。「最高のテクノロジーが最高の結果を生むわけではない。地元の方たちと時間を使い、言葉を使い、膝を突き合わせながら少しずつ良いものを作り上げていく。これこそが地元で仕事をやる面白みであり、醍醐味です。」

また、東京で働いていた時は、担当者同士がどこか他人行儀などところがあると感じていたという。しかし「地方の、特に漁業のような第一次産業は直接顧客の生活とつながっているの

で、要望や要求もストレートで、いい意味でも人も懐っこ

い人が多い」と人付き合いの魅力を話す。

廣野さんは自身の体験をもとに将来的なUターン、Iターンの見据え、積極的に大学生インターンなどを受け入れている。今年採用した大学生からの「自分のできることに地域に役立っている実感」を持つことができた、「漁業という地域に根ざした産業に携わること

で、その地域を支え活性化させている実感がある」との感想が、廣野さんの中に印象深く残っているという。

軽に、ワクワクしながら来てみてほしい」と話す。このアドバイスは、「自分自身が踏ん切りをつかぬまま、必要にかられてUターンした訳ですが、飛び込んでみたら都会で考えていた『地方暮らしのイメージ』よりずっと良かった」という廣野さんの経験に基づいたものだ。

I・Uターンを考える学生に対して、廣野さんは「まずは気